

推薦文集

平成23年4月17日 朝日新聞 朝刊より記載

■ 葬式をしない寺 大阪・應典院の挑戦 秋田 光彦 〈著〉

■ ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む 磯村 健太郎 〈著〉

被災地でボランティア活動に取り組み僧侶から話を聞いた。彼は避難所を訪ね、心のケアに携わろうとした。彼が「精神的に辛い思いを抱えている人の相談役を引き受けたい」と申し出たところ、相手から激怒されたという。

「いま僧侶の袈裟を見ると、死を想起するから来ないでほしい」「こんなときに宗教勧誘・布教活動なんて不謹慎だ」――。

被災地で奮闘する僧侶は大勢いる。彼らは死者の弔いを引き受け、東奔西走している。避難所として機能する寺院もある。袈裟を脱ぎ一人のボランティアとして活動する僧侶も存在する。

しかし一方で、「僧侶は死んでからしかやって来ない」と揶揄されてきたことも事実だ。現代社会では葬式や法事が形骸化し、僧侶への共感が薄れている。

そんな中、積極的に社会問題とかかわり、活動の領域を広げようとする僧侶たちが存在する。『葬式をしない寺』の著者・秋田光彦は、應典院の代表で浄土真宗大蓮寺の住職をつとめる。應典院の檀家はゼロ。葬式や法事はせず、運営はNPOによって行われている。

秋田が目指すのは「開かれた寺」だ。人は場とめぐり合うことで、他者と世界に生かされていることを知る。これこそ仏教の「縁起」だと彼は言う。

應典院が再建されたのは1997年。外観はコンクリート打ちっばなしで、連日、演劇やトークイベントが行われる。心に傷を抱えた若者が集い、居場所にする。僧侶はつなぎ手となり、苦悩に寄り添う。

『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む』で紹介される僧侶たちも、現代社会で苦しみを直視し、新たな仏教の可能性を模索する。

炊き出し、合同墓、フードバンク、シヤワーサービス……。

貧困が拡大し、無縁社会化する日本。その中、僧侶たちが「縁」を作るためにアイデアを絞る。

ここで紹介される曹洞宗正山寺の住職・前田有全は、門の脇の掲示板上に「あなたのお話 お聴きします」という紙を張り出したという。「他人には些細なことでも、あなたにとっては重大な問題ですから」と書き添えた。すると、通りがかりに見た人が、次々に相談にやってき

た。前田は悩み相談を自殺対策の一環として続ける。僧侶には「語る力」以上に「聞く力」が重要なのだ。

日本に存在するお寺の総数は、コンビニよりも多い。欧米では、教会などの宗教施設が公共空間として重要な役割を担っている。寄付などの社会的再配分の動機付けとして、宗教が果たす意義は大きい。日本でも、僧侶やお寺の果たす公共的役割が見直され始めている。2冊の本は、日本仏教の新しい魅力と可能性を示している。

△評▽ 中島岳志

北海道大学准教授・アジア政治